
第四次聖杯戦異話

満数 駆(みちかず かける)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第四次聖杯戦異話

【Nコード】

N2160BA

【作者名】

みちかず 満数 かける 駆

【あらすじ】

もしも聖杯戦争に本来のサーヴァントではなく、異世界の英雄が召還されたとしたら？というクロスオーバーです。基本的に作者がこんな感じかな？という程度のパワーバランスで構成されていますので、少し原作と違う展開になってしまいかもしれません。そんな感じの短編的な話を進めていますのでよろしく願います。

1・キャスター編（前書き）

第四次聖杯戦争で全く違う異世界から彼等が召還されたとしたら？
というクロスオーバーでお送りして行きます。まだ経験が浅いので、
皆さまのご意見ご感想をお待ちしております。

1・キャスター編

Side

ケイネス・エルメロイ・アーチボルト

『ランサー。バーサーカーを掩護してセイバーを殺せ。“令呪をもつて命じる。”』

「主!？」

…まったく、我がサーヴァントながら頭にくる。なぜ態々敵を助ける様なことをするのか。騎士道だの誇りだの、そんなものはサーヴァント“風情”には相応しくない。

港の倉庫街。その一角の屋根に潜み戦局を隠れ見っていたケイネスは、己のサーヴァントに失望を隠せずいた。マスターの透視能力を持つてして視たセイバーのステータスは脅威の一言に尽きる。序盤での破魔の紅薔薇で無効化した風のような宝具に加え真名をアーサー王と、それこそこの場で倒さねばならぬ脅威であることは明白だった。

バーサーカーの乱入には気を害されたが、あの黄金のサーヴァントを軽くないなし今度はセイバーへと疾走した狂犬。これを利用しない手はない。

自身でも気付かぬ程度に焦りを感じていたケイネスは、令呪をもつてランサーにセイバー討伐を命じたことにより更に戦場へと目を向ける。…その背後に、自分以外の影が近寄っていたとも知らずに。

「まったく…ようやくこれで」

ランサーも自分の命令に従うようになる。そう続けようとした唇は、背後から迫る無数の弾丸によって阻まれた。

ヒュン、と風を切る音が26。《50AE弾》 デザートイ
ーグルなどの大型拳銃によって発射される弾丸がケイネス目掛けて
飛来する。

その瞬間。それこそケイネスすら知れぬ瞬間ですらケイネスの礼装・
ヴォールメン・ハイドログラム
月霊髄液は持ち前の自動防御によって弾丸を防ぐため展開される。

ここで、仮《IF》の話になるが、これが唯の弾丸であれば
ヴォールメン・ハイドログラム
月霊髄液は苦も無く26の弾丸を防ぎ切り、それを察知したケイネ
スも自身を狙う不埒物がいたことに気が付いただろう。そう、唯の
弾丸であればの話だ。

「がつ！？ぐ、あ…！」

水銀の盾を容易に貫通した弾丸は、ケイネスの急所7か所、その他
15か所を貫き、ケイネスの命を悉く奪った。

S i d e o u t

「な…、主！ケイネス殿！？」

セイバーへと肉迫するはずだったランサーは、自らの主の魔力供給が途絶えたことを察知し、ケイネスがいる倉庫の屋根を凝視する。このとき、ケイネスに迫っていた弾丸を察知したのはスコープ越しに狙っていたセイバーのマスターと、無数のアサシンだけだった。

「っ！？アイリスフィール！！」

「え？きやつ！」

「む！？坊主っ！！」

「うわぁ！？」

「！！！」

セイバーは自身の直感でアイリスフィールを抱いて、

ライダーは戦車の後ろに座っていたウェイバーを腕で庇い、

バーサーカーは手に持つ鉄のポールを振り回し、

それぞれに迫る、計44発の弾丸からマスターを護った。

唯の弾丸ならサーヴァントの身を傷つけることは敵わない。…しかし、それらの弾丸は薄く紫の魔力を纏いバーサーカーやライダーの腕と背中を確実に傷を負わせていた。

対するセイバーは、アイリスフィールごとその瞬発力を持って全力で避けたため傷はなかった。しかし、その心中は驚愕に染まっていた。否、それはこの場に居た全てのマスターやサーヴァントが共通で感じていた事だ。

この場には千里眼で覗くものや、無数に分裂したアサシン、スコープを使った科学的な視認や使い魔を利用した発見が難しい物も含めそれこそ、無数の眼があつた場所なのだ。

にもかかわらず、“襲撃者が攻撃した瞬間”を、誰も見ていない。これは異常だ。それに弾丸だというのなら、発砲音すらしていない。

「…やっぱり、最初からマスターを狙った方が早いよね」

「っ！？誰だ！！」

背後から聞こえた効き覚えのない女の声に、セイバーはアイリスフィールを庇いながら、剣を向ける。そこに立っていたのは、黒髪の少女。腕には不格好な円形状の盾をつけ、拳銃を手に持っている。…また、気配すらなかった。セイバーが恐れを抱くのと同時にライダーも傷ついた身をそのままに、戦車から身を乗りだし大声で現れた少女に口を開く。

「いきなり攻撃とは、随分な態度だのう…、お主、何者だ？」

それに対し黒髪の少女が返した言葉は一つ。銃をもう一つ何処からともなく出し、セイバーとライダーに照準を合わせる。

「キャスターよ」

1・キャスター編（後書き）

キャスター：なにほむなんだ…！？というわけで、第一話でした。
バーサーカーマジ空気。しばらくはキャスター編で断片的に話を進
めて行こうと思います。リクエストやご意見・ご感想をお待ちして
おります。

2・キャスター編（前書き）

ちよつと原作を読み返すうちに案が溢れて来たので軽く続きを。短編のつもりで各イベント刻みで話を進めて行くつもりなんですが、大丈夫です…かね？

2・キャスター編

Side 遠坂 時臣

遠坂邸の地下室。黄金のサーヴァント・アーチャーのマスターである遠坂時臣は自らの工房で内通している協力者 アサシンのマスター言峰綺礼と魔術を用いた念話をしていた。

内容は、無数に分裂する宝具を持つアサシン“達”による諜報について。これにより、遠坂陣営は表の戦力であるアーチャーだけでなく、裏の戦力としてアサシンを用いて聖杯戦争での情報を集めさせようと画策させていたのだ。

「すまない…綺礼、もう一度言ってくれないか…」

だが、時臣はたった今報告されたこと信じられず聞き返してしまった。『常に余裕をもって優雅たれ』という遠坂家の家訓も、今の時は時臣の心には無かった。

「…はい、私も信じられませんが…。街中に配置していたアサシン達の消滅を確認しました」

「馬鹿な…」

「…つまり、先にアーチャーによって消滅したアサシン《サイド》も含めて生き残りはこの遠坂邸と教会に残った10体にも満たないのが、現状のアサシンの戦力となります」

時臣は愕然とする。第一段階としてアサシンに情報を探らせるのは、彼にとつて聖杯戦争を勝ち抜くため必須事項だったのだ。最強のサーヴァントと最良の情報網。表裏万全で挑んだはずの聖杯戦争は、皮肉にもわずか一日で激変した。

「私の傍にいたアサシンの情報によると、“突如死角から攻撃”を受け、“ほぼ同時”に数十体ものアサシンが殺られた、このことです。…おそらくは」

「キャスター、か…」

「はい…」

おそらく、という言葉は綺礼は使ったが…ほぼ間違いはないだろう。何故なら七体のサーヴァントは既に出揃い、それぞれの能力とまではいかないが、ある程度の性能は把握できたためだ。

セイバー・ランサー・バーサーカー。宝具によっては不明だが、対人に大きな戦果を残すタイプだろう。

そして、ライダー・アーチャー・アサシン。前者の内2つは自らの陣営の。ライダーは自らをイスカンダルと真名を衆目に晒した。そんな奴が闇討ち染みたことをするのは考えにくい。

つまり、必然的に残るは“問題”のキャスター一人というわけだ。

倉庫街での戦闘。キャスターはマスターの襲撃に失敗すると、

即座に撤退した。ランサーの様子から、どうやら彼のアーチボルト家の当主は敗れたようだ。

だが、それよりも気にかかったのはキャスターの攻撃手段。アサシンの眼を以てしても、どのように攻撃したのかが分からなかった。その件を調べる為、綺礼に調査を依頼した結果が、これだ。

「くっ」

柄にもなく後悔の念が込み上げてくる時臣は、深夜に今後の戦略について、根本的に練り直す必要があると悟った。それが彼にとってどういった未来を招くのか、それはまだ彼にも、そして言峰綺礼にも分かる由も無かった。

Side out

Side キャスター

時を戻すことほんの四半刻。キャスターはビルの屋上にいた。そして足元で光の粒子と消える黒い影を見下ろしながら呟いた。

「これで大体倒したかしら？」

キャスターは自分を追ってきていたアサシンを察知し、彼らを討伐する為、街の中を飛び回っていた。もちろん、他のサーヴァントや

マスター、使い魔などにも“見つからない”ように、だ。

「まあ、ただ追いかけてくるだけなら、“アイツ等”何かよりもマシなんでしょうけど…」

キャスターの脳裏に浮かぶのは自らに戦う運命を科した白い獣だ。しんりゃくじや
故に、キャスターはそういった輩を倒すには慣れていた。

「…少し、濁ってしまったわね」

キャスターは紫の宝石に目をやり、少し黒ずんだ部分を認めると黒い宝石を取りだした。それを紫の宝石に近付けると、黒ずんだ部分が黒い宝石に吸い込まれて、元の紫の輝きを取り戻した。

それに満足したのか、黒い宝石を仕舞い、街を見渡す。

夜の街。光はまだ消える様子はないが、街にはどこにも暗い場所がある。その暗い場所で、消えて行く命がある。キャスターは自分が召還されたときのことを思い出していた。

キャスターを召喚したのは雨生龍之介という殺人鬼だった。彼が召還の際に用いたのは、襲った一家の血だった。そしてその場にいたのは彼だけではなく、“生贄として用意された”死にかけていた少女だった。

彼は意図してやったことではなかったが、その少女は召喚の際の触媒として發揮された。彼女の願いを。“誰か助けて欲しい”

という願いが触媒として、彼女を召喚せしめた。

結果からいえば、召喚されたキャスターは、龍之介を即座に射殺した。本来ならそれは、あり得ないことだ。何故ならサーヴァントはマスターを失ったなら魔力供給を受けられずに消滅してしまうからだ。しかしキャスターはなんの躊躇もなく、マスターを殺害してしまう。

「……………」

「…『じめんなさい』」

既に息を引き取った少女に謝罪をする。間に合わなかったことを。助けを求めた少女を、救えなかったことを。

「…まどか」

その呟きは、誰も聞くことなく虚空へと溶けた。

2・キャスター編（後書き）

おや？今回はなにやら「まどか」や「紫の宝石」など気になるキーワードが出てきましたね。これからどうなるんでしょう。ちなみに作者はアサシンが大好きです（キリッ）
では次は三話にて。失礼します。

3・キャスター編（前書き）

前話で触れなかった注意事項について報告させて頂きます。

この四次聖戦異話は、キャスターによる虐殺がないためいくつか原作と大きく乖離する点があります。ご注意ください。（例：ケイネスの城進行、キャスター討伐令など）

3・キャスター編

Side ウェイバー・ベルベット

「キャスターよ」

そういつた眼の前の黒髪の少女は、ライダーとセイバーに銃撃をすると“またいつの間にか姿を消していた”

「くっ…どこへ…」

さっきまでランサーと死闘を繰り広げていたセイバーは、マスターを背に庇いながら周囲を警戒している。そしてマスターらしき女性も、不安げに周囲を見回している。

僕は、何もできなかった。ライダーがいなかったら、僕もケイネス先生みたいに…。

自分の未来の想像が脳裏を横切り、一気に吐き気が込み上げてくる。最後の意地として口を押さえ、込み上げるものを無理やり戻す。

「坊主…」

「う、五月蠅、い…！こんなもの！」

「まったく…妙なところで頑固なやつだのう…坊主は」

ライダーが意地を張っているウェイバーをことを、ため息交じりに苦笑する。それもほんの一時ではあったが、この場にあつた戦場の空気が晴れたからだろう。

原因のキャスターがいなくなり、この場に残るは警戒しているセイバー。マスターを失い茫然としているランサー。狂気を振りまくバーサーカー…は、魔力供給をカットされたのか霊体化した。

この場に残るは三体のサーヴァントだが、ランサーはマスターを失っている。戦闘は出来ても大幅な弱体化は否めないだろう。

「主…ケイネス殿…ソラウ様…。申し訳ありません…。私は…！」

「っ！なんのつもりだ、ランサー…！」

セイバーに槍を向けるランサー。その体は魔力供給を失ったからなのか、先程までよりも薄く感じる。再び戦場の空気が張り詰めて行く。

「セイバー。既に俺はマスターを。…ケイネス殿を護る事が叶わなかった。しかし、それでもマスターの最後の命令は護らせて頂く。…構えよ！」

「…いいだろう。その覚悟、我が剣を持って答えよう」

「…感謝する。いざ、参る!」

勝負は一瞬で着いた。双つの英雄が重なるように斬り合い、鉄のぶつかる音。立っていたのは片方のみだった。剣を振り抜き、騎士の誇りを賭けた好敵手を倒したセイバー。槍を羽根の様に掲げ、膝をつき動かないランサー。…セイバーが、勝ったのだ。

「…騎士王よ、では、また次の戦場で」

「さらばだ、ディルムツドよ。また次の戦場で会おう」

感銘の思いも、主への無念もそのままに。ランサーは別れを短く告げて消えて行く。

こうして、此度の聖杯戦争、ランサーとして召喚されたディルムツド・オディナは英雄の座へと去って行った。その願いを胸に宿したまま。

「…退くぞ、坊主。此度の戦いはここまでだ」

「え?あ、うん」

「逃げる気か?ライダー」

セイバーがライダーを呼び止め、剣を持って闘気を露わにする。が、ライダーはどこ吹く風とばかりに誘いを断る。だが逃げるわけでもなく、それはお互いの力を認め合うかのようにだった。

「止めとけ、セイバー。…騎士の戦い。真に素晴らしきものを魅せてもらったわい。それに、消耗している貴様と王としての器を争った所で、本意ではないのでな。また別の機会を設けるとしよう」

勇猛な笑みを浮かべた二人の王。僕はそれを、ただ見る事しかできなかった。

僕はまた、見ているだけだった。

S i d e o u t

3・キャスター編（後書き）

という訳で第三話、ウェイバー編でした。

今回で脱落したサーヴァントはランサーでした。ちなみにソラウ様は途方に暮れて帰国しました。

では、また次回四話にて。

…あれ？今回ランサー逃げてれば魔力供給は受けられ（ry

4・キャスター編（前書き）

今回は難産でした…。セイバー陣営の会話となります。…とここで各話の長さはこのくらいで大丈夫ですか…ね？
また今回のあとがきで次回の予告があります。

4・キャスター編

Side セイバー

「アイリ、キャスターについてなにか気がついたことはないかい？」

此処は冬木市郊外の城 アインツベルンが聖杯戦争の為に用意し、拠点として配置された陣地だ。その一室のサロンで衛宮切嗣と久宇舞弥、そしてアイリスフィールとセイバーの四人で作戦会議を行っていた。

切嗣は冬木市の各霊脈や、聖杯の降霊箇所として相応しい地点など地図を注視しながらアイリスフィールと話し合っている。そして話の矛先は、例の倉庫街でのキャスターの奇襲へと移った。

「いいえ…、私が気付いた時にはセイバーに助けられていて…。あなたはどう？セイバー」

「はい、私も咄嗟に直感スキルで攻撃を回避できましたが…。ライダーやバーサーカーが避けられなかった所をみるに、あれは特殊な魔術による加護を受けた攻撃、…あるいは宝具の可能性もあると考えられるでしょう」

「そうか、アイリ。こちらでも使い魔や暗視スコープによる視認でランサーのマスターに攻撃したところを見た。だけど、どうにも“いつ攻撃したか”が分からない」

セイバーの報告には目線一つもくれることなく、切嗣は自分が得た情報をアイリに説明する。…が、互いに　　というよりは全てのマスターやサーヴァントが感じたことだろう。あの神出鬼没な攻撃は脅威だ。キャスターというよりはアサシンに近いものを感じざるを得ない。

また彼女の攻撃傾向も危険極まりない。「マスター>サーヴァント」で狙う様はまさにアサシンと言えるだろう。

が、唯のアサシンならばそこまで警戒に値しない。アサシンは【気配遮断】のスキルによって姿を隠す。それにより、敵マスターの間をつくのだ。ただし【気配遮断】には大きなデメリットがある。それは攻撃する瞬間に大きく性能を落とす、ということだ。

無論、唯のマスターならアサシンを倒すことは敵わない。だが、サーヴァントなら別だ。

隙を突こうにも、サーヴァントがマスターの傍に居る限り安易に隙をつかれる事はないだろう。

そこで、本題だ。キャスターの不可解な攻撃。“だれも攻撃した瞬間に気がつかない”ということだ。先程、切嗣が言ったことが確かなら、キャスターの攻撃はマスター（近代科学的）にもサーヴァント（霊体視認）にも発見されないということだ。更には消えた瞬間すら分からなかった。

既にランサーが敗れ、敵は残す所5体。

自ら真名を発した征服王イスカンダル。

大胆不敵な黄金のサーヴァント・アーチャー。

黒い狂気に身を包んだ漆黒のバーサーカー。

切嗣の情報によって生存が確認されたアサシン。

そして、神出鬼没のサーヴァント・キャスター！。

既にランサーから負った傷は癒えており、万全の状態だ。仮に、今すぐ戦闘が始まろうと十分に応戦し勝利を掴むことが出来るだろう。キャスターの件で重い沈黙がサロン内を包み、セイバー達は一堂に会し言葉に詰まってしまう。すると切嗣は意を決したかのようにアイリスフィールを見据え今後の方針を語る。

「…アイリ、君はセイバーを連れ、また明日から冬木市市内を捜索してくれ」

「な…」

切嗣の言葉に、セイバーとアイリスフィールは驚愕を。舞弥は瞳をほんの少し見開くことで驚きを露わす。一瞬の硬直の後、セイバーが激昂の表情で切嗣へ詰め寄る。

「気は確かですか、マスター！？街を捜索ということは生存していたアサシンはもちろん、あのキャスターに見つかる可能性すらあるのですよ！？そんな危険な事を、あなたは、自分の妻を」

「待つて、セイバー！」

「アイリスフィール…！」

何故…といった眼差しで見るアイリスフィールを見据えるセイバー。それを目で抑えるよう伝えて、アイリスフィールは切嗣へ向き合う。

「必要な…ことなのね？」

「そうだよ。この聖杯戦争を勝ち抜く上で、必要な事なんだ」

「…分かったわ」

「っ、アイリスフィール、何を!？」

「聞いて、セイバー。私はね。切嗣のおかげで、生きるということに興味を持つことが出来たの。イリヤを産んで、おっぱいをあげて、切嗣の妻として。そしてイリヤの母として。そしてこの戦いは…私が切嗣と共に立つことのできる、最初で最後の舞台なの」

「…っ…！」

私ね、城の外に出るのはこれが初めてなの

セイバーの脳裏に、初めて街を歩いた時のアイリスフィールの儂い笑顔が浮かぶ。…これまでセイバーは、アイリスフィールの覚悟など考えてはいなかった。否、考えていても軽視していたのだろう。

だが、目の前にいる女性は、自らのマスターの妻もまた、自分たちと同じ“覚悟”をもって戦いへ挑んだのだと。この覚悟を蔑ろにすることは、彼女の誇りを否定することになると。

「分かりましたアイリスフィール。我が剣にかけて、貴女をお護りすることを誓います」

「ええ…ごめんなさいね？戦うのは貴女だというのに、足手まといになってしまって…」

「そんなことはありません。港でも言いましたが、私の背中をお願いします」

「分かったわ、セイバー。任せ、っ　　！！」

「アイリスフィール!？」

急に頭を押さえ痛みを抑えるように蹲るアイリスフィールに、セイバーは驚愕を。対して切嗣と舞弥は準備してあった銃火器を取り出すと動作確認を始める。

大丈夫とセイバーに伝えるとアイリスフィールは水晶を取り出し千里眼の魔術を行使する。すると郊外の森　　そこに二つの影が映し出された。

「これは…!？」

「切嗣」

カチャ、と銃器のスタンバイを終え、こちらを見る切嗣。魔術師殺しにしてセイバーの真のマスターにアイリスフィールは一言。

「敵襲よ」

覗き見た水晶の中には、黒髪の少女、キャスターと狂気を振りまく、黒い狂戦士の姿があった。

S i d e o u t

4・キャスター編（後書き）

という訳で、バーサーカー：何スロットなんだ！？まさかの共闘です
次回では真の主人公と人気が高いあのおじさんのターンです。：ち
よっと展開早いですかね？

5・キャスター編（前書き）

お待たせしました、昨日は仕事で五日連続投稿は出来なかつたです。今話でおじさんサイド。彼こそ主人公でいいと思うなあ…。

PS・ちよつと桜のことを軽く話すぎたかな？と思い、修正しました。ご迷惑お掛けします。

5・キャスター編

Side 間桐雁夜

倉庫街での戦闘で、バーサーカーはセイバーに向かつて暴走した。その際に消費された魔力は、確実にそのマスターである雁夜の体を蝕んでいた。

本来のマスターならば、魔力を回復すれば再び戦うことが出来るだろう。ただし、雁夜は一年前にある少女を救うために即興でマスターとなる為は無謀な。自殺行為とも言える手段によってマスターとなることができた。無論、それは常に痛みという形で雁夜の精神を削っていく。

「ゲウウ、…ガアア…!!」

「無様よのう…雁夜。わずか一晩でこのザマとは…」

間桐の家の地下工房 その最奥の蟲蔵。常に何処からキイキイと蟲の轉る鳴き声と這いずる音が絶えぬ初代当主・マキリ・ゾオルケンの城。

既に人外の域まで行き、第一次聖杯戦争から生存している化物だ。それほどまで永い時間を、聖杯の為に賭けている。

雁夜はバーサーカーに消費された魔力を補うため、刻印蟲を体中に這いまわしている。それにより苦痛に苦しむ姿を、ゾオルケン

臓硯は人ならざる様な醜悪な笑みを浮かべ見下す。

「この調子では、やはり此度の聖杯戦争は望み薄だな…。故に次回。貴様が執着している桜の子かその孫に期待するしかあるまい。…その時に桜は生きているかわからんがなあ…！」

「臆…硯…キサ…マア…!!」

「呵々。その調子で憎むがよい。その絶望で、魔力を生み出せばまた戦えるやもしれんぞ? かり」

グシヤ。なにかが爆ぜる音と、ボロボロと崩れ落ちる音。それと同時に地下工房は炎に包まれた。

「え…?」

口から自然に零れる疑問。そしてカチャ、と冷たい鉄を自分の頭部に押し当てられる感触。それを見上げようと身を振り、先程の音の発生源を目にする。

蟲の死骸。それも尋常な数ではなく、“小柄な人間くらい”の量の虫が 息絶えていた。そして、自分を見下ろす黒い少女。

「あなたがバーサーカーのマスターね…」

「…く…を」

「余計な事をすれば、撃つわ。貴方に聞きたいことは二つ。他のマスターの居場所と、…聞いているの?」

キャスターは銃を雁夜に向け質問をするが、雁夜は何かうわ言のように呟いている。流石に様子がおかしいことに気がついたキャスターは、警戒しつつも雁夜の呟きに耳を傾ける。

自分はここで死ぬのだとしても、あの子だけは…!!

「さ、くら…を…助…け…くれ…!」

「さくら?」

「二階、にいる紫、…髪の毛…女子…、だ」

瀕死の雁夜は、キャスターの呟きに希望を見出し“さくら”の居場所と容姿を伝える。そして、力尽きるように気を失う。

「 わかったわ」

その間に聞いたキャスターの言葉に、雁夜は安堵した。

Side out

S i d e . キャスター

アサシンを始末する際に発見したマスターの本拠地。フードを被った男の手には令呪が宿っていたため間違いはない。

キャスターは“正面から堂々と”間桐宅に侵入し、酒を飲んでいる男の前を素通りして 令呪が無かった為 魔力と、なにか得体の知れないものが這いずる地下へと足を踏み入れる。

「…っ！」

そこには、部屋全体に棲む蟲。そしてその蟲によって体を蝕まれて
いる男と、それを見て笑っている人成らざる者がいた。地に伏して
いる方の男に令呪を確かめると、キャスターは立っている化物そっけんに3
0発余りの弾丸を放ち、部屋を焼き払う為に焼夷手榴弾を8つほど
部屋中に行きわたるように投げる。

そして、 能力を解除 異常に気がついた雁夜の頭に銃を
向けた。

「え…？」

「あなたがバーサーカーのマスターね…」

「…く……」を」

「余計な事をすれば、撃つわ。貴方に聞きたいことは二つ。他のマスターの居場所と、…聞いているの？」

体の痛みの苦悶からか、唸るような声を上げる雁夜に質問をするが、それが違うのだとキャスターは気づいた。

「さ、くら…を…助…け…くれ…！」

「さくら？」

「二階、にいる紫、…髪の…女の子…、だ」

そういつて気を失った雁夜に、キャスターの口からは自然に肯定の意を発していた。何故かとも思ったが、それはおそらく　自分と同じ“願い”を抱いたからだろう。

火に驚いたからか、雁夜の体を蝕んでいた蟲は彼の傷の中に潜り込んだり、逃げ惑ったりしていた。それをおぞましく思いながらも、キャスターは雁夜を担ぎ二階へと向かう。

その一室に、少女がいた。紫の髪に、無気力そうに俯きベットへ座っている。その眼は何処かを見ているようで、おそろくなにも見えない。それほどまでに、彼女は絶望している。

意識してのことではなかったが、自然にキャスターの手にある紫の宝石に、黒い染みが広がった。

少女　桜はいきなり現れたキャスターを見ても驚く、という様な事はなく無言でキャスターと、担がれた雁夜を交互に見ている。

「あなたが、さくら？」

「はい。そうです」

「そう。…この男の頼みで、ここから逃げるの。着いてきてくれるかしら」

「逃げ、る…？」

始めて桜の目に光が宿った気がした。こちらを見上げる桜に、キヤスターは痛々しいものを見る様な悲痛な眼差しで桜に手を差し出す。

「そうよ。もう、貴方を苦しめるものは消えたわ」

「……………ほん、と…っ？」

「ええ。本当よ」

「ここから、帰れ、るの？」

「そうよ」

「おじい様は…？」

「消えたわ」

「お母さんと、姉さんに、会える…の？」

「会えるわ。…もう、苦しい事もしなくていいの」

本人も気が付いていないのか、話の途中から涙を流して返事をする。泣き出してしまった桜を片手で抱きしめて、キャスターは再びその場から姿を消す。

その後に残されたのは、燃える間桐の家。消火活動をする消防隊。そして狂ったように笑う間桐鶴野だった。

S i d e o u t

5・キャスター編（後書き）

という訳で、キャスターは『誰にも気づかれない』・『瞬間移動の
ようなもの』の二つの能力を持っているようです（キリッ

…短編と言いつつなんだかねで続いていますがいいですかね？ホ
ントは2、3話で終わらせるつもりが面白くて案が出てくるんです
がw

では、また次回で会いましょう。

6 ・キャスター編（前書き）

平日は2、3日に一話作る感じで進んでいくのでよろしくお願います。

6・キャスター編

Side . 間桐雁夜

「……は……」

「目が覚めたようね」

雁夜は魔術を身に刻んだ一年間の中で、一番自然な気持ちで目覚める事が出来た。 おそらく身に満ちている魔力のせいだろう

ベッドで目が覚めた雁夜に声をかけたのは、間桐宅へ奇襲をかけたキャスターだった。

真白な部屋。雁夜がいるのは部屋の隅（何処まで広がっているのか分からなかったが）のベッド。すると雁夜は思い出したようにバツと上半身を起こし、部屋を見渡す。

「桜は！？…、グ、ウ…！」

「興奮すると死ぬわよ。…体に残っていた蟲は除去したわ。あの子も、ね…」

「…そうか。あの子は、どうしてる…？」

「眠っているわ。貴方よりマシ、とはいえ体内の呪術による寄生蟲を駆除するのに、あの子はまだ幼かったから」

「そうか…よかった…ありがとう…ありがとう…！」

キャスターに感謝の言葉を告げる。雁夜は自分でも気付かぬ間に泣いていた。自分が死ぬ気で助けるはずの彼女。それも、臆視の気まぐれによつては反故にされかねない危うい賭けだっただけに。“桜を助ける”　それがなされた感動は、歓喜は、その他全てのことを失うとしても　得難い誓いだっただの。

その後は少しずつ現状への説明がされた。自分と桜が間桐の家から運び出されて、18時間余り。深夜の邂逅だったが、眼が覚めたのもまた夜だった。ちなみに間桐の家は焼いたとのこと（これには驚いた）

次に蟲は焼き払って、魔力の残照も残らないようにしたとのことだ。これは聞いて安堵を深めた。そして話の矛先は自分たちに根付いた蟲へと移った。

「…そういえば、どうやって蟲の除去を？あの爺の蟲は、並の生命力じゃないはずだ。持ち主の魔力がある限り、それにより延命をする類だったと思うんだが…」

「簡単よ。その蟲が耐えられないほどの魔力を持ち主に送ればいい。コップが溢れるほど、大量に水を注ぐのと同じよ」

「　だ、大丈夫なのか…！？さつき、桜は幼すぎるって…」

キャスターから蟲の除去の方法を聞いた雁夜は、眠っている桜の身を案じて不安になった。自分でもこの痛みを伴っているのに、あの

子は大丈夫なのか…。
それも、キャスターの説明で全て杞憂だったことが分かる。

「問題ないわ。むしろ、貴方の方が重傷ね。あの子は私の送った魔力にも適用して見せたわ。問題の蟲の方が莫大な魔力に耐えられなくて、あの子の中から這い出て…自滅したわ。もう少しあの子が蟲によって“変わって”しまっていたら、結果は分からなかったけれど」

「…そうか」

キャスターからの説明によると、ようするに基盤の違いだった。雁夜は出来損ないの魔術回路によって魔力を蟲から得た即席の魔術師だ。そんな彼は蟲を殺すほどの魔力を注がれたら体に痛みが残るが、桜は元々魔道の家の娘。それに耐えて、適応するほどのポテンシャルを彼女は持っていたそうだ。

その後、雁夜はキャスターに戦う理由を聞かれ、自分の戦う理由をぼつり、ぼつりと語りだした。

桜が遠坂の当主。実の父親に捨てられたという事。

それによりその桜の姉の凜、母の葵という人が悲しんだという事。

家に戻ると、桜に間桐の魔術によって蟲に犯されていたという事。

彼女を救うために、聖杯戦争に参加したという事。

そして、遠坂時臣を許せない、と。

「あいつが…桜ちゃんを間桐に養子に出さなければ…こんなことは…！」

「だから、遠坂のマスターを許せないのね」

「そうだ…！アイツを…時臣の野郎を殺して、思い知らせてやる…桜ちゃんの絶望を…！」

「そう」

遠坂時臣への悪意を露わにする雁夜に、キャスターは否定も同意もしない。が、それは興味がないということではなく

「じゃあ、貴方は再び時臣の妻、葵や凜という少女。…それに今度は桜を悲しませるつもりなのね」

「え…？」

雁夜は一瞬、意味が分からなかった。自分が　　？あの子たちや、葵さんを悲しませる？

「な、なにを言って…！」

「だって、自分の夫を。父を奪われるのよ？悲しまない方が不思議でしょう？」

「でも、あいつは桜を見捨てて！」

「それは今関係ないわ。…仮に、貴方が遠坂のマスターを殺したとしましょう。そして貴方によって桜は遠坂の家へと帰らされる。そして、時をほどなく置かずして貴方も死ぬ」

「それは…」

「そして今度こそ彼女たちを護る者はいないわ。…貴方が遠坂を殺そうとしている。それがあの子にどういう結果をもたらすのか、改めて考えなさい。此処に居れば敵は来ないし、発見もされないわ」

「…分かった」

頭の中が混乱しているのか、声に力が無い。半ば無気力とも言えるその様に、興味を失ったのかキャスターは出口へと近づいていく。すると思いだしたかのように雁夜の方を振り向き、軽い口調で言い出した。

「今からセイバー達を攻めるわ。…貴方のバーサーカーを貸してくれるかしら？魔力は貴方に大量に注いだからまず、一度二度で切れる事はないと思うわ」

「…好きにしる。武器を渡せば何でも使いこなすから、覚えておけ」

「分かったわ。それじゃあ、また後で」

そう言い残し、実体化したバーサーカーを連れ、今度こそキャスターは部屋から消えた。唯一人、今までの自分を疑い始めた異形のマスターをそのままに。

S i d e o u t

6・キャスター編（後書き）

バーサーカーの意思なんてなかった（キリッ
次話でアインツベルンに喧嘩売りに行きます
乞うご期待

7・キャスター編（前書き）

少し時間がかかってしまいました…。

ようやくまともな（？）戦闘となる…のかな？

それでは、どうぞ。

7・キャスター編

Side・衛宮切嗣

「何故、バーサーカーがキャスターと…!?!」

目の前でセイバーは、アイリの映した千里眼の水晶から敵　キ
ヤスターと、バーサーカーを見て驚愕している。確かに、何故奴ら
が共闘するのは知らないが、そんなことを考えても仕方がないだ
ろう。

所詮、メイガス・マードゥ衛宮切嗣やセイバー英雄様に出来る事は戦う事しかないのだか
ら。

「舞弥、アイリを連れて城の裏口から逃げろ。合流地点は冬木の第
二拠点の　」

切嗣は冷静に、自らの部品てあしの舞弥へと指示を出す。舞弥自身、切嗣
の考えを把握していたため確認事項といくつかの指示を回す。それ
と並列して、城内の監視カメラから城の様子をノートパソコンを通
して確認する。

「切嗣、私は奴らを　」

「アイリ、君のエスコートは舞弥に頼む。悪いがセイバーを奴らの

足止めに回してくれ」

「え、…わ、わかったわ」

「っ…！」

アイリスフィールは無視され憤慨するセイバーを気遣い、チラチラと目線で切嗣を促す。が、切嗣はパソコンのモニターと千里眼の水晶から敵の位置や罠の配置場所など確認している様子で、セイバーのことなど気にも掛けていない。

二人の信頼関係はズタズタだったが、今はそんなことを気にしてられない。アイリはセイバーへと向き合い、微笑みを浮かべながら戦場へ赴くパートナーへと激励する。

「セイバー。…また、私はあなたの力になれないけれど…。貴方の勝利を、信じているわ」

「アイリスフィール。…お任せ下さい。貴女に、勝利を」

「ええ、お願いね？私の騎士様」

アイリスフィールの機転で、ひとまず険悪な空気からは解放された。舞弥から脱出の準備が出来たと報告を受けた切嗣は、頷く事で舞弥へと指示を飛ばす。

「…マダム。そろそろ」

「ええ…。それじゃあ、セイバー。切嗣。武運を祈るわ」

「分かりました」

「ああ」

是で返された答に満足したアイリスフィールは、舞弥と共に城を脱出する。セイバーは切嗣に一度だけ頷きで応じ、甲冑へと身を転じ城下の森へと身を走らせた。

それを横目で一瞬だけ確認し、再びモニターに視線を向ける。

戦いは既に、始まっていた。

S i d e o u t

S i d e . セイバー / キャスター

覗き屋^{アサシン}を始末する時に発見した郊外の結界。それぞれの陣営の拠点はある程度搜索済みで、この奥には城。セイバー陣営の拠点がある。

前回は様子見程度で深入りはしなかったが、今回は違う。協力者^{バーサーカー}と共に結界を抜け、城へと向かう。その道中、キャスターは雁夜の助言を思い出し、バーサーカーへと手持ちの武器を渡す。

「この銃を使いなさい。…弾はこれ。使い潰して構わないから、
実際にセイバーを足止めして」

「 …… A r …… : t h …… a …… : …… ! ! 」

狂気を身を宿しながらも、キャスターからの“武器”を受け取り装着する。…その見た目の甲冑から違和感が避けられないが、両手に持つ“武器”の性質上、肩からかけたベルトが必須となることは確かだろう。

マスターの命令か、もしくは何らかの事情からか思いのほか素直に指示を聞くバーサーカーと共に森を進んでいくキャスター等。

そして、ついに彼女が姿を見せた。

蒼いドレスに白銀の甲冑姿。金の髪に翡翠の瞳。その手に握るは不可視の剣。

其の真名を、アルトリア・ペンドラゴン。セイバーの座に招かれし最優の騎士王サーヴァント

セイバーの姿が見えるとともに、バーサーカーは咆哮と共に、狂気を孕んだ眼光で両手の“武器”をセイバーへと解き放った。

「な！？バーサ ……」

「 …… ! ! ! ! ! 」

弾丸を放つダダダ、という発射音。そしてそれにより引き裂かれる、シヤシヤシヤ、という空気の悲鳴。それらが混じり、人が作った殺人の為の道具から放たれる弾丸は、バーサーカーの黒い魔力を帯びてセイバーへ襲いかかる。

ブローニングM2重機関銃。第一次世界大戦末、ジョン・ブローニングによって開発された。続く第二次大戦以降でも各国の軍隊で使われた有名な重機関銃である。

発射速度は弾種によって上下するが約500〜800発。初速は800m/分、装弾数は110発で、ベルト給弾によって補充される。本来、重機関銃という重量面での理由から設置型のため三脚などを用いるが、バーサーカーはそれを両手で掲げセイバーへと撃ち放つ。

「セイバーは任せるわ」

「待て！キヤス」

「A a a r t r !!!!!!!」

バーサーカーの猛攻を回避するセイバー。その様子を見てキヤスターは城へと向かう。セイバーは自らの役割の為、止めようとするがバーサーカーがそれを許さない。

両手の黒く染まった機関銃から魔弾をばら撒きその手を阻む。魔力的概念をもたない現代重火器といえども、バーサーカーの能力によって宝具と化している。

その威力は媒介として魔力を通すキヤスターとは比べ物にならず、

サーヴァントといえど致命打を与える威力を誇る。

セイバーも、先の倉庫街での戦闘でバーサーカーのスキルを重々承知している。故に、防ぎ、避けざるを得ないのだ。ならば、出来る事はひとつ。一刻も速く敵を倒し、切嗣マスターの助力へ向かう。その為には

「くっ…、往くぞ、バーサーカー…！」

「A a a r r r r ……！！！」

狂戦士の銃口が咆え、騎士王の聖剣が己が敵を討つ為に輝く。ただ、セイバーにも。そしてキャスターにも、誤算があるとすれば

Side out セイバー

Side . キャスター

セイバーをバーサーカーに任せ城へ向かう。道中は特に何もなかったが、城内はどうなっているのか分からない。念の為能力を使う準備をしつつ、扉を開け

キン、バララララララ ……！！！！

鈍い系の切れるような音と、銃弾の放たれた発射音。“さっきまでキャスターがいた”場所が蜂の巣のようになる。

が、それに気を取られる暇もなく、今度はエントランスの両サイドにある彫像が爆散し、クレイモア地雷 内部の700個の鉄球が爆発と共に周囲を巻き込み飛来する。

これも、“敵が気付かぬ内”にエントランスの中央階段へと移動することで回避する。すると今度は天井のシャンデリアから、キャスター目掛けて数十の銃口が火を吹く。

「…やれやれね」

再びキャスターは、監視カメラから姿を消した。

S i d e o u t

7・キャスター編（後書き）

という訳で、戦闘、開始です。ちなみに話の進行が早いかもしれませんで、一応補足を。

今回のキャスター進行は、原作でのキャスターの進行と日を変わずに行われていることになっています。

次回の更新は三日以内に必ずしますので、またよろしく願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2160ba/>

第四次聖杯戦異話

2012年1月14日03時49分発行